

2009 年度

東洋大学博士学位論文

# フッサールにおける超越論的経験

学位請求論文要旨

東洋大学 大学院 文学研究科 哲学専攻 博士後期課程

学籍番号 4110030004

中山 純一

## 学位請求論文要旨

文学研究科哲学専攻博士後期課程

学籍番号：4110030004

中山純一

フッサールの発生的現象学は、受動性という特殊な経験構造を解明する。それは、構成的現象学の体系に即して、構成の受動的な下層へと辿っていく分析であると同時に、意識そのものの受動的な下層へと辿っていく分析、つまりフランクの言う「意識の生体解剖」でもある。その際には、意識そのものが生きられつつあるものとして解剖されていくのであり、それも段階的、部分的に麻酔剤を投与することで、意識の最も下層にある受動性という経験に至ろうとする。その際に注意せねばならないのは、解剖されつつある意識は、まさに自己の意識であるということだ。「意識の生体解剖」とはしたがって、自らが自ら自身へと、しかも生きてままである自己へと解剖を企てている意識の臨床的な現場なのだ。したがって解剖の開始以前も、そして解剖中も、そして解剖が終了した後も、意識は決して死せる意識となつてはならず、生き続けていなければならないだろう。発生的現象学の分析は、ともすれば容易に鼓動を止めようとする自らの生ける意識に対して、それを生き生きとしたまま解剖しようとする、自己意識分析の徹底化の試みの一つであると言える。

第一部では、フッサールの受動性概念をまずもって探究することで、多義性を伴って示される受動性の「経験」によって、発生的現象学の〈方法〉に転回が要請されていることがまずは確認される。フッサールにとって受動性は、外的かつ経験的な感性を受容するカント的な意味での受容性とは根本的に区別された、先反省的で、先自我的な体験領域での「経験」一般を表現している。したがって、本来的な総合による構成の能作に対する非本来的な総合である、受動的総合としての感性的総合の働きのうちに受動性の「経験」が示されることになる。こうした総合は、内在的存在者の構成層の最低層における感性野の自発的組織化を明らかにするものであり、同時にこうした組織化を通じた触発の機構を先自我的体験として解明するものである。受動的総合には、自我からのいかなる能作も関与していないが、しかしながら他方で、こうした自我の無関与性にかんして、フッサールの受動性概念は二義性を示すことになる。すなわち構成に自我が無関与であるという「総合の受動性」と、意識が流れるという出来事に自我が無関与であるという「流れの受動性」である。この後者の受動性概念において、能動-受動の対立的関係からは決して理解しえないフッサール独自の受動性概念として、端的な行為の活動性の次元が顕かになってくる。この、内在的対象性の構成へと接続する流れることに無関与な、端的な行為の活動性が受動性概念に含まれることは、意識という「経験」の受動的な下層を露呈させた発生的現象学の〈方法〉それじたいに、更なる転回を要請することになる（第一章）。

このように、発生的現象学の〈方法〉に転回することを要請している発生的現象学の〈事象〉は、内的時間意識分析において露呈されてきた「意識」の両義的な存在論的身分に端的に表される。存在者のあり方を、その内在的時間形式における与えられ方の「如何に」を通して問う内的時間意識分析においては、こうした問うものである構成する「絶対的意識」そのものが、内在的対象性を構成しつつ、自らをも構成しつつ（構成されつつ）あるという〈事象〉として、つまりは意識流の自己構成として、両義的な性格を伴って現象化される。中期時間論に配置される『ベルナウ草稿』においても、構成する原プロセスと被構成的プロセスの関係において、原プロセスがプロセスへと流出する関係構造にこうした両義性が確認される。構成と被構成の対立状況から導かれた、構成するものの自己構成という意識の循環構造によって示される〈事

象)に直面して、現象学者は当然のことながらそうした構造の背後に絶対者を構築することで、実体形而上学へと安易に移行することはない。むしろ現象学者は、こうした発生的現象学の〈事象〉の両義性に直面して、自らが携えていた〈方法〉そのものに批判的分析を行使することへと向かう。ここには、発生的分析の進展によって深化してきた〈事象〉から、〈方法〉それじたいに更なる転回が要請されてきていることが読み取れるであろう。このような〈事象〉の両義性を導いたのが発生的現象学の〈方法〉であるが、現象学者は、そして何よりフッサールその人は、自らの〈方法〉を転回させることで、更なる〈事象〉の深化へと自らの身を委ねていくのである(第二章)。

しかしながら、発生的現象学から転回していく現象学の〈方法〉は、「エポケー」や「還元」のように、フッサールによって現象学的〈方法〉として自覚的に叙述され、体系的に展開していったわけではない。こうした事情のうちには、フッサールが著作として叙述したことと、彼が実際に思惟したこと(行えたこと)、つまり著作ではなく草稿として彼が叙述したことの間に乖離が認められる。したがって、我々の分析もこの段階で、フッサールが体系的に叙述した事柄のうちから、彼が実際に行えてしまっていることを明るみの元へと連れ出すことで、転回を経験した現象学的〈方法〉を彫琢することへと向かう。そのための第一段階として、M.アンリを中心に展開されてきた「生の現象学」の立場から突きつけられている、フッサール発生的現象学批判を検討することで、現象学的〈方法〉の彫琢へと向かう我々の分析の基本的立場を形成していこうと思う。「生の現象学」の立場を特徴づけると、彼らは受動性を、知覚的意識の下層に配置される感性的経験という非自我的体験の領域にではなく、感情の触発的体験である「情感性」に基づいた世界経験の開示の場面に設定する。その際に露呈されるのが、根源的な受動性である「存在論的受動性」としての「情感性」に基づいたパトスの生の自己触発的する機構である。ここでは、感覚-知覚主導の認識主観性の体系のもと、発生的現象学の〈方法〉によって限局されて設定されてきたフッサールの受動性概念が、「情感性」としての「生命」へ向けて開かれることが目論まれている。こうした「生の現象学」の試みは、意識の受動的層としての生へ向かうフッサールの課題を忠実に継承したものであると言える。しかしながら彼らの立場は、感性的経験を一方的に遮断しそこから離れることで、徹底的に非志向的な「情感性」に至ろうとする。確かに、フッサールの受動性概念に含まれる諸前提を指摘し、それを批判的に乗り越えようとしたことは首肯できるが、そこから彼らが導き出した新たな展開方向が、非常に徹底した仕方で感性的経験を排除することで感情の場面を取り出したゆえ、「生の現象学」の「情感性」もまた、発生的現象学における受動性と同じく、非常に制限された経験の場面しか扱えていないと言わざるを得ない(第三章)。

我々は第一部の最後で、発生的現象学に向けられた「生の現象学」の批判の立場を、その妥当性を検証することで批判的に見極めた。「生の現象学」の徹底的な受動生へと批判を向けているのが、フッサールの遺稿研究を背景に、新たにフッサールの発生的現象学の特性を際立たせ、更には応用的な展開可能性を探究している論者たちである。こうした試みのうちには、知覚の受動的構成層に位置づけられる感性的経験に、レヴィナスの「感受」の契機や、異他性との遭遇という経験のあり方を背景に、感性的なものとは異なる感情的体験を取り戻す方向が確認される。その際には、構成層に即して能動的志向性の発生的基づけの役割を担っていた受動的志向性が、意志や欲求などの実践理性の働きとしての実践的志向性として解釈し直されている。更にはフッサールの触発の機構に、彼の「具体的主観性」の内実即して有価値性が認められることで、感性的なものに制限されることのない実践的行為の場面での受動性概念が積極的に提示されてきている。ここでは、認識することを主な働きとする志向性とは異なる、実践的な働きとしての意志志向性がフッサールの受動的志向性として解釈され、感性的経験に限局されない感受的な自己身体に基づいた「具体的主観性」が形成されてきている。こうした解釈からは、フッサールの能動的志向性：受動的志向性の区分が、高次の意識作用：低次の意識作用という区分にのみ限局されることなく、それぞれが理性の論理的関心と実践的関心に即した意識のあり方として新たに解釈し直されている。しかしながらこうした立場は、発生的現象学の〈事象〉を実践としての生へと開くことでより豊かにすることを通じて、その制限性を突破する力

はあっても、その際に採られている発生的現象学の〈方法〉そのものに批判的まなざしを向け、それを積極的に転回させることへと向かってはいない。つまり、発生的現象学の実践的転回の立場にたつ論者たちは、発生的現象学において行使されている「脱構築」という〈方法〉が有する制限性への批判的視点を我々と共有することはあっても、この〈方法〉によって規定されて上昇の道をとる「再構成」をより具体的に、実践的な生の場面へと開いていく方向へ向かうのであって、発生的現象学の〈方法〉それじたいが有する制限性を突破していく道をとることはない（第四章）。

以上のように「生の現象学」の試みと、フッサールの発生的現象学における受動性の実践哲学的解釈の試みを精査することで、発生的現象学からの転回を経験した現象学的〈方法〉の内実を、この第二部では明確に規定していこうと思う。新たな現象学的〈方法〉において現象学者はすでに、「反省」という方法を用いて〈事象〉へ向きあっている。「反省」の限界点において示される「反省」の無限反復といったアポリアに際して、現象学者はそうした「反省」の可能根拠を明るみにもたらそうと試みると同時に、こうしたアポリアのうちで感触されている「反省する」という自己の実践的活動性に気いていく。こうした、自らの実践的活動性への気づきを通じて、現象学者は自らがとっていた「反省」という〈方法〉を転回させている。フッサールの後期時間論に配置される『C草稿』の「生ける現在」という問題系は、こうした「反省」という〈方法〉の限界性に直面した現象学者が、自らの〈方法〉を転回しつつ語り始める〈事象〉分析に他ならない。しかしながら、フッサールが実際に行使できていたこの現象学的〈方法〉が、「エポケー」や「還元」のように、明確に〈方法〉として叙述され、そのあり方が体系的に説明されたことはなかった。我々はここで、こうした転回を経験した現象学的〈方法〉のそのあり方をより明確に規定していくため、フィヒテの「知的直観」に範をとろうと思う。フィヒテの「知的直観」は、カントにおける感性的直観：知的直観の関係における役割とは異なり、自らが活動するさなかで、この自己の活動性そのものを自己直観する能力として提示されている。こうした自己の活動性は、フィヒテの「知識学」においては、哲学者の「思惟する」という活動性である。つまりそれが「反省」という活動性であれば、まさに「反省すること」のうちで、こうした「反省すること」という活動性そのものに、哲学者は自己直観していることになる。ここに示される活動性の自己直観という「知的直観」の働きはしたがって、自己の活動性を「反省する」という働きとは根本的に異なる能力である。「純粹経験」を取り出す際に用いられていた西田の「自覚」もこうした活動の自己直観の能力であり、フッサールが用いていた概念のうちこうした能力に相応する働きを見出さうとすれば、それは彼の「内的意識」に設定されるだろう。周知のことであるが、フッサール自身は「内的意識」を「エポケー」や「還元」などと並ぶ現象学の〈方法〉概念として提示したことはない。したがって、「内的意識」を〈方法〉概念として彫琢することは、我々の本論での戦略になる。しかしその際には慎重にならねばなるまい。なぜなら「内的意識」は、ブレンターノの「外的知覚」と「内的知覚」における後者と等しく用いられることもあり、また働きの側面からして「原意識」にも等しいものであるからである。更に「内的意識」は、「内在的意識（知覚）」と混同して度々用いられていることもあり、「内的意識」を現象学の〈方法〉概念として積極的に活用していくことに、若干の躊躇を覚えるのも事実である。しかしながらフッサールが取り出していた、「反省」とは異なる体験のあり方、つまり体験していることのうちで、この体験していることを体験できる能力としての「内的意識」に、活動性の自己直観という能力を積極的に認めていくことで、転回を経験した現象学的〈方法〉の内実を具体的に語ろうと思う（第五章）。

最後に、今述べた哲学的思惟の自己感触という能力と同時に、感触された知そのものの実在性を根拠づけている働きをフィヒテの「知的直観」のうちを確認することで、現象学的〈方法〉としての「内的意識」に、現象学において自己知の実在性の根拠づけを担っている方法的立場を補完することで、現象学的〈方法〉の転回を完成へと導こうと思う。フッサールの「内的意識」そのものに、哲学的思惟という自己知の実在性の根拠づけの働きは含まれていない。それゆえ我々の具体的分析は、こうした役割を担う現象学的〈方法〉を現象学の文脈から引き出すことへと向かう。まさにこうした役割を現象学のうちで担っているのが、現象学的思惟の、つまり「現象学すること」の実在性を根拠づける試みとして遂行された、フランクの『第六省察』

における、第二次的世界化、世間化の問題係である。ここで注意を喚起しておく、フインクの『第六省察』は、フッサールの『デカルト的省察』全体の省察の歩みによって予告されている、「現象学の自己批判」の立場に基づいた真正の現象学的分析である。『第六省察』の前半部では、現象学的思惟の主題化が現象学者の素朴性の自覚化を促すことを通じて超越論的 Zusehauer を露呈しつつ、「超越論的生の二元論」として主題的に論じられる。そして後半部に至って、現象学的思惟を再び自然的な生へと送り返す課題が取り組まれる。フインクによって〈超越論的/現象学的経験〉と名づけられるのも、こうした現象学的思惟という自己の活動性への気づきを通じて、この思惟そのものの実在性を根拠づけるべく再び世界へと送り返す、こうした一連の超越論的な生の出来事を経験する現象学者の経験に対してである。もとより、フッサールの〈超越論的経験〉とフインクの〈超越論的/現象学的経験〉は、彼らの直接的な対話のうちではその相違が強調されてしまうが、しかしながらフッサールが『C 草稿』において語る、自己の根源的な活動性への気づきの場面での「経験する」という動詞は、まさに「超越論的なものの経験」としての〈超越論的経験〉の場面が取り出されていたと言えるだろう（第六章）。

我々は第三部から自らの分析の色調を転じ、フッサールの〈超越論的経験〉の積極的展開の可能性を考察していこうと思う。第二部までの分析の歩みを通じて次のことが明らかにされてきた。それは、自己の活動性への気づき、そしてこの気づきを通して、自己の活動性を調整する能力を鍛錬しつつ、更にはこの活動性の実在性を根拠づけている、こうした一連の経験によって示される超越論的生のあり方に、フッサールの〈超越論的経験〉が具体的に示されていることである。もちろんその際に我々は、フッサールの現象学的思惟から若干離れつつ、以下のような解釈を施してきた。それは一つには、「反省」という〈方法〉から転回する現象学的〈方法〉として、フッサールの「内的意識」を解釈したことである。そしてこの「内的意識」を通じて気づかれてきた自己の活動性を - もちろんそれを空虚な理念的、形而上学的構築物として一方的に破棄してしまうのではなく - まさに行為しつつあるという自己の実践的な活動性として見抜き、そしてその実在性を根拠づける働きとして、フインクの「第二次的世界化（世間化）」を探究してきた。つまりここで根拠づけられるべき実在性とは、感性的経験を通じてのみ明らかにされてくる事物的経験によって端的に示される Realität としての実在性ではもはやなく、自己の実践的な活動性という Aktualität としての実在性である。このようにして実行されてきた本論での我々の試みは、フッサール-フインク両者の現象学的立場の相違を、一人の現象学者の連続した省察の歩みとして一貫して最初から歩み直すことで、現象学者の経験として表現される〈超越論的経験〉が具体的に語られ始める地点を提示していると言える。

後続する第七章では、現象学における〈超越論的経験〉の場面をより詳細に設定していくために、フッサール-フインクの省察の歩みが一人の現象学者の経験として一貫して辿られることが示される。こうした分析では、静態的現象学から発生的現象学に展開する構成的現象学がとっていた〈方法〉が、発生的分析の遂行にともなって深化した〈事象〉によって、自らの転回が要請される現場が描き出されるのみにとどまらず、〈方法〉が転回することで、自らが〈事象そのもの〉へと成り至っている現場が描き出されることになる。ここで現象学的〈方法〉は、「見ること」に依拠した明証を基準として〈事象〉を描き出そうとしているのではもはやなく、むしろこうした「見ること」という〈方法〉の立場を解除しつつ〈事象〉の動きのうちへと自らを投げ出すことで、〈事象そのもの〉を自らにおいて表現しようとしていると言える。もとよりこうした方法的立場は、「超越論的経験論」を提示している G. ドゥルーズが、生命の差異化する動きを捉える際に採っている戦略であることは知られていよう。まさにここに、現象学における〈超越論的経験〉の問題系と、ドゥルーズの「超越論的経験論」とが交差する地点が確認される。第三部全体の議論が、「超越論的経験論」としてフッサール現象学を展開する可能性の探究に費やされているが、その際に試みられているのも、潜在的なもののうちで差異化しつつ自己現実化（現働化）している生命の運動を、フッサール現象学全体のうちでいかにして表現しうるのか、その可能性の探究に他ならないのだ（第七章）。

フッサール現象学における、潜在的なものの差異化、そしてこうした差異化を通じた生命の

自己実現化（現働化）の場面は、彼のモナド論の展開において 30 年代に語られる「モナド化」の思想に示されていることを、我々は確認するだろう。具体的な主観性概念にフッサールは〈モナド〉という名を与えたが、この具体的な自我が差異化し、個体化しつつある生命の出来事が「モナド化」である。そもそもフッサールにおいても〈モナド〉は、世界との関係における具体的かつ個体的な自我を意味しており、単に論理的可能性の前提としての形式的な純粹自我、超越論的統覚とは区別されている。こうした自我の具体性を形成しているのが習慣である。フッサールのモナド論の展開における習慣には、獲得されてきた知が、習慣を通じて身体へと沈澱化を経ることで、実践的な行為の発動の根拠を形成していることが理解される。ここに、具体的主観性としての〈モナド〉の、その具体化の過程が表現されることになる。このようにして形成される具体的な生であるモナド的生のうち、習慣によって自己へと還帰しつつある知の転換的運動が確認されよう。「モナド化」という出来事によって表現されるのも、こうして沈澱化された知が実践的な行為へと発露しつつある潜在的な生が、生命の個体化という自己現実化を遂行する様子である。それゆえ、フッサールの「モナド化」の分析は、潜在的なものが差異化しつつ個体的なものへと自己実現化している生命の、その動きに即した形式的な探究として評価されうるだろう（第八章）。

以上を受けて、本論文の結論では、「モナド化」という動きに示された、潜在的なものの差異化しつつある生命に、フッサールの〈ハビトゥス〉概念、「受動的習慣性」概念を概観することで、そこに動きの内実即した探究を補完することになる。この試みを通じてフッサールの〈超越論的経験〉は、その形式内容ともに具体的に規定されて提示されることになろう。そして何よりも、ここで明らかにされた生命の差異化という運動こそ、現象学における〈超越論的経験〉そのものであり、翻って〈超越論的経験〉として表現されることになった現象学における生命の差異化の運動は、フッサール-フイックを通じて示されている現象学者の省察の全体の歩みそのことに他ならない。フッサールにおける〈超越論的経験〉とは、現象学者としての生命の差異化の運動の自己表現である。